

小学校における「ことばの教育」

—ことばがことばの未来を創る—

渡辺香代子(埼玉県幸手市立上高野小学校)

1. はじめに

明るい未来にすべく導入された小学校の教科外国語であるが、現状は明るくはない。児童にとって英語は得体のしれない言葉となり、小学校段階で既に多くの英語嫌いを生んでいる。不足しているのは何か？それは、外国語教育に必要な母語教育である。母語は、外国語が言葉であることに気付かせる。そして、外国語の力と、母語の力さえも高める。本発表では、国語教育と連携させた小学校における外国語教育の実践を通して、母語教育及び母語の必要性と重要性を示す。

2. 外国語教科化後の今の現状

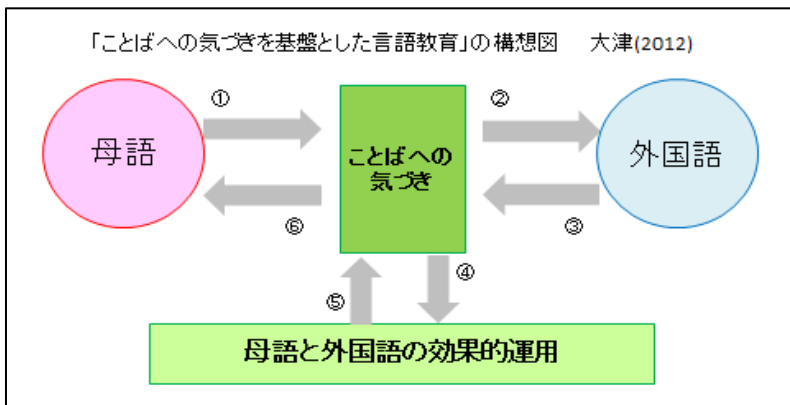
昨年 7 月 31 日に、文部科学省が 2023 年度の全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の結果を公表した。新課程で学習した中学 3 年生の英語の(「聞く」「話す」「書く」)の平均正答率は 46.1%で、(単純比較はできないものの)旧課程の時よりも 10.4%低下している。「話すこと」においては、正答率はわずか 12.4%で、前回よりも 18.4%低下している。中学校におけるこの現状に加えて、実際教科として外国語が導入された小学校においては、文部科学省の調査で、「英語の学習が好きではない」と答えた小学校 6 年生の割合は、2013 年度は 23.7%であったが、2021 年度は 31.5%という結果となった。これが“小学校から外国語に明るい将来を”と外国語を導入した結果である。

現在小学校においては、外国語の授業での活用のみならず、テストにおける ICT 化に伴って ICT 教育を加速させている。中学校においては、ここ数年、都立高校入試への英語スピーキングテスト(ESAT-J)の活用が問題となっている。学習媒体問題も重要ではあるが、先の結果を踏まえ、危機意識を高め、一刻も早く核心に迫った問題解決の打開策が必要である。本発表では、小学校という義務教育かつそれ以降の教育の学習の基盤となる「基礎段階」としての小学校で、明るい未来の外国語教育を目指し、何が必要であるか、どんな役割であるべきかを考える。

3. 小学校における打開策

- (1)ことば(英語及び外国語)をことば(言語)として捉えさせる教育の必要性:国語科と連携した母語教育の強化
- (2)外国語の効果的運用:母語教育の基盤の上での外国語教育への転換
- (3)“気づき”の小学校:外国語教育における小学校段階の役割の明確化

小学校において現段階で考えうる打開策を3つ挙げる。これらを目的とする教育をここでは「ことばの教育」とする。そして、ここでの言語教育の基盤となる構想図¹を以下に示す。



図中、①は「小学校段階で、直感のきく母語を使って気づきの育成を図り」、そののち、②の「中学校段階から、その気づきを利用して、外国語教育を進める」を示すものである。詳しくは分科会で扱う。小学校段階で、ことばをことばとして気づかせる気づきを促し、国語教育と連携させた外国語教育において必要な基盤を築き、中学校において、主に英語を通して外国語教育の基礎固めをし、高等学校及び大学において、より豊かで多様な言語にふれ、学ぶ外国語教育を推進するものである。

本発表における主張は、「英語の前に国語である」「小学校で多様な外国語にふれる場を設けるべきではない」といったものでは決してない。「外国語を学ぶために母語の力がより必要である」「小学校で多様な外国語にふれる機会を積極的に設けるべきである。しかし、それが第一の目的ではなく、その機会を通して外国語教育に必要な気づきを確実に促しておく必要がある」というものである。したがって、本発表は、小学校において多種多様な外国語を豊富に扱う言語色豊かな実践紹介ではない。その逆で、将来それを実現させるために、一つの言語(母語)を取り上げ、その重要性和必要性を、具体的な授業を通して示し、紹介するものである。なぜなら、母語教育こそが、豊かな外国語教育を支える重要な礎となるからである。

¹ 大津由紀雄(1989)「メタ言語能力の発達と言語教育 - 言語心理学からみたことばの教育」『月刊言語』第 18 巻・第 10 号, pp.26-34.

大津由紀雄(2012)『学習英文法を見直したい』研究社.